

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	増地 ひとみ
論文題目	現代日本語におけるカタカナ使用の実態とその背景
審査要旨	
<p>本論文は現代日本語における片仮名の使用実態とその背景を調査、分析したものである。現代日本語の一般的な表記においては、外来語のように片仮名表記が原則とされるものがある一方で、和語や漢語などの非外来語についても片仮名表記がなされることがあって、どのような場合に非外来語の表記に片仮名が用いられるのかが問題にされてきた。本論文は、テレビ放送における字幕や CM、日用品の包装、交通広告など、従来の研究では取り上げられてこなかった伝達媒体に着目し、現代の社会生活に密接な関りをもつ伝達媒体における非外来語の片仮名表記の実態を調査している。これに加えて、学術雑誌のような、非標準的な片仮名表記の現われにくい文献における片仮名の使用状況を確認し、また E メールを資料として片仮名使用に対する個人の表記意識をさぐるなど、考察を広範かつ多面的なものとしている。それらの資料から得られた例によって、非外来語の片仮名表記の要因を探り、その背景に関する理論的分析を提示している。以下、具体的に各章の内容を確認する。</p> <p>まず第 1 章序論において、問題点を提示し、本論文の目的と構成について述べる。非外来語の片仮名表記を含め、日本語における文字種の使い分けに関する条件を明らかにするためには、文字種の使い分けについて、どのような要因があるのかを明らかにし、そのうえで要因相互の関わり合いを考察することが必要であることを指摘している。</p> <p>第 2 章では、先行研究を概観し、用語等の定義を行っている。方法として、語用論やポライトネス理論の視点を取り入れることが述べられている。</p> <p>第 3 章から第 7 章は具体的な調査結果を含む各論にあたる部分である。大量の資料による調査によって多くの例が得られており、実態が確認されるとともに、精細な分析と解釈が示されている。</p> <p>第 3 章では、テレビ放送におけるテロップなどの文字情報を取り上げている。意味や用法によって、非外来語でありながら片仮名表記をされやすいものがあることを確認するとともに、視聴者への働きかけの姿勢の違いという点で、番組の性格などのコンテキストや、それを反映する表記主体の意識といった語用論的な要因が働いていることが指摘されている。</p> <p>第 4 章では、テレビ CM の文字情報を取り上げている。非外来語で片仮名表記されることがある語について、テレビ CM における実例を収集し、商品のジャンルや、放映時の社会状況と関わる部分があることが指摘されている。</p> <p>第 5 章では、表記主体の表記意識をたどるために、個人の E メールにおける片仮名使用が取り上げられている。ややくだけた内容を含め、職場においてやりとりされた E メールを資料として、非外来語の片仮名表記の例が収集、分析されている。テレビの文字情報や CM と異なり、特定の個人の間でやりとりされる E メールでは、独自の要因として対人関係を背景とするポライトネス(待遇意識)の側面が加わることが指摘されている。</p> <p>第 6 章では、日用品のパッケージと交通広告が取り上げられている。これらは、多くの人々が日常生活の中で何気なく目にしてはいるものであるが、そうした日常生活からの受容を通して、個人の表記意識や表記規範に影響が及んでいるのではないかという見通しが述べられている。</p> <p>第 7 章では、学術雑誌における非外来語の片仮名表記が取り上げられている。学術雑誌では専ら規範的な表記が行われ、非外来語の片仮名表記も限られているが、そうした中で、やはり片仮名表記される非外来語があつて、それらは、場面や表記者の意識等には関わりなく、片仮名表記されることが定着している語群であろうとして、具体的にそれらの語を指摘している。</p> <p>第 8 章では、片仮名表記の要因の一つとして指摘されてきた埋没回避という現象が検証されている。埋没回</p>	

氏名 増地ひとみ

避とは、文字列の中で語の切れ目を示すために前後の文字種とは異なる文字種を用いようとして、非外来語の片仮名表記が生じるとする解釈で、具体例の確認を通して、そうした働きをもつとみなしうる例がある一方で、そのような埋没回避と解釈できる片仮名使用の例はごく少数であり、全体として、埋没回避が大きな要因になっているとは認められないことを確認している。

第9章と第10章は、以上の内容をうけて、非外来語の片仮名表記の要因と背景を分析、総合的に考察したものである。

第9章では、非外来語の片仮名表記が行われる要因を改めて整理し、その相互関係を考察している。要因として、言語的要因と非言語的要因、促進要因と抑制要因という区分を設け、それらの要因のバランスのうえに非外来語の片仮名表記がなされることを指摘している。

第10章は第9章の内容をさらに展開させたもので、非外来語の片仮名表記については、特に抑制要因にあたるものを考慮に加えるべきことを先行研究への批判として提言している。

最後に第11章結論で、論文全体のまとめと今後の課題を述べている。

本論文は、綿密な調査によって得られた膨大な実例にもとづくものであり、現代日本語における非外来語の片仮名表記の実態の提示としても十分な意義をもつものである。収集された実例を分類、整理した語彙表が巻末に付されているが、その語彙表は40ページをこえており、その語彙表自体が現代における非外来語の片仮名表記の実態を示す貴重な成果となっている。そうした調査を踏まえて、非外来語の片仮名表記が生じる要因を精密に分析、考察しており、それらの分析は、新たな研究上の視点を提示するものとして評価できるであろう。現象自体が個人差を含む複合的な要因によって生じているものであり、普遍的な規則性をもつものとして記述することは困難な現象であるが、そういった制約の指摘を含めて、妥当な解釈が示されているといっていよいであろう。

従来の研究では不十分であった現代日本語における片仮名使用の実態の調査とその理論的な分析として評価に値する成果であり、博士学位を授与するにふさわしい論文である。

公開審査会開催日	2018年11月24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高梨 信博	日本語学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	上野 和昭	日本語学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	森山 卓郎	日本語学	博士(大阪大学)